

【熊本国税局長賞】

森林環境から考える税の意義と役割

八代市立第一中学校

三年 野元 優奏

「プルルツ、プルルツ」今日もスマホから熱中症警戒アラートが届く。このところ、毎日のように鳴り響く音。テレビをつければ、今日も全国で熱中症患者が出ていることが報じられている。猛暑日が続き、日本中が大変なことになっている。

「地球温暖化のせいだね。今年度から森林環境税の徴収も始まったし、何か変わるといいよね。」

と母が言った。聞き慣れない森林環境税という響きと、それが最近の異常な暑さの対策にどう結びつくのか、すぐに理解できずに私は少し戸惑った。そこで私は、森林環境税と森の役割について調べてみることにした。

森林環境税とは、簡単に言えば森を守る財源となる税である。国税として一人年額千円が徴収され、都道府県と市町村に配分される。日本の森林は国土の約七割と広大であり、森は非常に多くの機能を果たしている。動植物などの生態系保護の役割だけではなく、雨水を地中に浸透させることで川への急激な流出を防いだり、木の根で土を固定させ土砂崩れを防ぎ、下草や落葉、枝などがあることで表土が流れ出るのを抑えたり、と防災面でも私達の生活を支えてくれている。私は以前、とあるイベントで森を散策した。その時手入れのされていない森は、雨で土が流れ、木々が枯れて茶色くなり、死んだ森となっている姿を目撃した。その時初めて、森は手入れが必要なのだと知った。人の手が入ることで森が守られ、生きるのである。そして日本の二酸化炭素吸収量のうち、九割以上は森林が吸収しているという。まさに森は、地球温暖化の防止に欠かせない役割を果たしているといえる。このように、私達の生活に恩恵をもたらしている森林を安定的に守るために、また森林の機能を十分に発揮させるために、森林環境税は大きな意義を持つことが分かった。また、この税は唐突に始まった訳ではなく、実際には長い間議論されてきたという。日本の林業は衰退し、林業の従事者が減り、一九九〇年代には間伐もできないという問題も起きた。一九七〇年代に植えた木を建築の材料として利用する時期にもなってきたが、どう活用しその後どう植林するかも課題となっている。日本の森林を持続可能なものにすることや、林業を持続可能なものにしていくには税をどのように活用すれば有効なのか、改めて考えてみる機会となった。

私は最近教科書で財政の仕組みについて勉強し、その中で、国民は生活に必要な様々な仕事を政府に任せる代わりにその費用として税金を負担していることや、国民も主権者として財政や予算に注目する必要があるということを学んだ。私達が税に無関心でいるのではなく、なぜその税が必要で、私達の生活にどのように関わってくるのか、常に意識していくことは国民の一人として大切なことだと考えさせられた。